

氏名	近藤 日出海
学位の種類	医学博士
学位授与番号	乙第65号
学位授与の日付	昭和39年3月31日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第5条第2項該当)
学位論文題目	ホルモン失調性胃潰瘍の実験的研究
論文審査委員	教授 砂田輝武 教授 田中早苗 教授 小川勝士

学位論文内容要旨

副腎皮質ホルモンの失調の際にみられる胃潰瘍の発生原因を知る目的で、副腎剔出ラットの胃にみられるエロジオン乃至潰瘍を潰瘍性変化と定義し、これと副腎剔出後の血液成分の変化並びに本胃の組織水分、塩類代謝との関係を検討した。

副腎剔出ラットおよび副腎剔出後種々の置換療法を行ったラットの胃の潰瘍性変化は、本胃にのみ出現した。この潰瘍性変化と全血残余窒素量および血清総蛋白量の変化との間には相関々係は認め難いが、血清 Na, K 濃度の不均衡状態との間には或程度の相関々係が何がわかれた。

また本胃の潰瘍性変化と本胃の水分含有量および Na, K 含有量の変化との間には相関々係は認められ難かった。

副腎剔出ラットの本胃の潰瘍性変化は、血清 Na, K 濃度の不均衡状態以外に、投与した置換剤の種類、量、投与期間などとも関係が深いようであった。

(岡山医学会雑誌)

論文審査の結果の要旨

近藤日出海提出の「ホルモン失調性胃潰瘍の実験的研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は、次の通りである。

ラットに副腎剝出を行うと本胃に潰瘍が高率に発生するが、この際生食水、DOCA を投与すると潰瘍発生が著明に防止され、コーチゾン少量を与えてもかなり防止されるが、コーチゾンの大量では抑制効果はあまりない。この潰瘍発生とその頻度の差は血液成分の変化、ならびに胃壁の水分および Na, K の変化と関係があるのでないかと追求した。

まず、全血残余窒素量は副剝後無処置群では著しく増加するが、置換療法を行った群ではその潰瘍発生率に差があるのかかわらずいずれにも著明な変化がなかった。したがって潰瘍性変化と全血残余窒素量の増加との間には有意な関係がない。血清総蛋白量との間にも同様深い関係を認めない。血清 Na, K 濃度との関係では、その濃度変化の大きい群に潰瘍性変化の発生率が高くその濃度変化の比較的軽い群では潰瘍性変化の発生率が低く、潰瘍性変化と血清 Na, K 濃度の不均衡との間に相関々係がある。

次に胃壁組織の水分含有量は、副剝ラットおよび副剝後生食水投与ラットでは増加するが、コーチゾン、DOCA 投与群では増加を認めない。すなわち組織水分含有量と潰瘍性変化との間に相関々係を認めない。同様組織 Na, K 含有量の増減との間にも関係はない。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり、著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有すると認める。